



Title	篠崎小竹（第一席）（第二席）
Author(s)	木崎, 好尚
Citation	懷徳. 1966, 37, p. 37-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90421
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

其の他に日本紀の刪正日本紀とか云ふものもある、と云ふ様な事を伺ひますけれども見た事はございません。果して存して居るものやら、何うか力を盡して其の著述だけは集めて見たいと思ひます。之で極く簡略ながら大要を先づお話しした積りでございますが、蘭洲遺稿の出ましたのは、實に太田君の力で、誠に結構な事でございます。先哲叢談には蘭洲の文多く傳はらずと云つて、唯烈婦湯死記一篇を載せてある丈でございますが、鶏肋篇及び遺稿の存して居るのは、先哲叢談と違つて居ります。斯様に世間に知られぬものが大阪に存して居るのは、學界の爲に喜ぶべき事で、何うか世に出す方法を活版でなりともしたいものでございます。

尙懷德堂の事に關しては、未成品と申すべき草稿に依てお話を申上げましたが、之からまだ研究を重ねねばなりません。夫に就てはお力を乞ふと與に、前刻申上げた通り來年は蘭洲先生百五十年に相當する、捨置けぬ事でございませうから、來年三月十七日には百五十年祭に相當するから、何うか本會が主となつて懷德祭を致したい、夫に聲庵、石庵、竹山、履軒の諸先生も祭りたい、夫れまでに不肖ながら私は少し事蹟も取調べて、新聞などにも書いて見たいものと考えて居ります。若し御賛成を得ましたなれば、夫から先の事は諸君のお教へを乞ひたいと思ひます。(完)

篠崎 小竹(第一席)

木崎 好尚 述

此の度、大阪人文會が組織されまして、其の第一回の眞先に當りまして、別段能く調もしていないお話を致しますのはお恥かしい事ながら洵に光榮な事と思ひます。デ甚だ不調法を顧みずに篠崎小竹先生の傳記の一斑をばお話ししたいと思ふのでございます。

私は大阪に生れましたので豫て此の大阪の先輩學者の切めては傳記だけでも調査がしたいと思つて居りました折節人文會が出来まして、平生は極く疎懶であるから兎てもさう云ふ調が出来ないのが圖らずも多少の調が出来た事は全

く此の會のお蔭であると非常に喜んで居るのであります。詰り小竹先生は大阪の町人文學者としての最も宜しい標本と云つては失敬であるが、大阪の儒者——町人儒者の一番の標本として大阪儒學界の一つの標準となる人物だろうと思ふので、特に此の人の話をしたいと思ひます。

尙多少取調べたいと思つて居りました時に當圖書館に於きまして小竹の遺稿が略纏つてお手に入つたと云ふ事を承つたので、夫れは丁度この夏の熱い盛りでございましたが、一週間許りの暇がございましたので毎日此處に通ふて調べて見た所が、其の材料は非常に結構なものであつて之まで世に出て居なかつたもの許りである。従ふて書いてある事は悉く吾々の目には珍らしき事許りのものですが詳しく見る事が出来ませんで、ホンの彼方此方拾ひ讀にした位であるが夫れでも取調べて見ると非常に材料負けをして、却つて自分の筆なり考へが及ばぬと云ふ所が多いのであります。夫れ程貴重な材料と信じて居るものは此處にあります此の本でございます。(机上に陳列しある小竹齋反古六冊、小竹齋吟藁五冊、南豐集一冊、小竹先生艸稿一冊、小竹齋文稿三冊)此の原稿本は小竹の極く若い時分のが一部分と、夫から中年から以後晩年までありますが、唯遺憾なのは眞中の言はば修業時代とも云ふべき時分のが缺けて居る。之は非常に遺憾であるが斯う云ふ會が出来まして段々其の道の方がお集りになれば何處からか足らぬ所は出て来るだらうと思ひます。デ他日を期してもう一遍取調べる事にします。其の他此處に材料を拜借しましたのは此の會員の濱君・鹿田兩君の御藏書が澤山あります。何うか後に御覽を願ひます。

さて此の小竹は其の家系が一寸面倒でございまして、夫と長生をされた方であるから話をするに非常に時間がかかる。略二つに分けて家庭と云ふ側と、學問と云ふ此の二つに分けてお話したいと思ひますが、兎ても一時間位の事ではいけませぬから先づ行ける所まで遣つて一時間程で御免を蒙ります。

家庭と云ふ方では家の系圖と夫から生れました時の事、篠崎家に養子になった時の事、夫から旅行、其の次には交際のあつた人、其の次には嗜好、夫から終焉と云ふ位の目を立てました。學問の方では修業時代、先生の學術人格、

夫から詩文書、門人と云ふ位の目を掙えました。先づ始めは此の家庭の方から申し上げます。

小竹の生れは豊後の国で日出と云ふ所であらうと思ひます。豊後の日出のお醫者に加藤吉翁と云ふ人があります。年の若い頃に豊後の府内の方に出てお醫者をして居った、其の加藤吉翁と云ふ人の仲の息子さんであります。斯れは後に小竹の養子の訥堂の作った小竹の行狀には、最初の原稿には季子とある。所が段々解らなかつたものと見へて門人の安東秋里に問合した所が季子であるまい、伯仲の間であらうと云ふ事で、段々調べた結果仲の息子に定つた。餘程怪しかつたものと見へますが先づ吉翁の仲子と云ふのが正しいらしい。夫から阿母さんは向井氏——名が解りませぬ。何うも漢文書きは苗字を書いて名を書かぬから一向解らぬ。何うぞ御承知の方はお知らせを願ひたい。生れは天明元年辛丑の夏四月十四日に大阪兩國町の家に生れました。兩國町は只今の兩國橋の南詰邊でございます。小竹の弟は亨安と云ふ、少し解りませぬが別に耕庵とも書きまして兩方の字を使ったものと見へる。耕庵と云ふ人は西成郡邊に別に家を立てて而して平野氏と云ふ事になつて居る。其の平野家の方に養子に行つて了ふて、餘り後には學問の方には關係ない、或はお庄屋とか何にかして居つた人だと思ふ。夫が即ち末の子であります。總領は解りませぬ。デ小竹は幼名を金吾と申し、即ち加藤金吾と云ふのが小竹の幼さい折の名前である。之に就て可笑しい話があります。江戸の儒者に篠崎金吾東海と云ふ先生がある。何だか似寄つたヤヤこしい名前であるから一寸申上げておきます。

夫から小竹の生日の四月十四日と云ふのは、唐の世の道士呂洞賓——呂巖と云ふ人が同じ四月十四日の生れであると云ふので、後に詩を作つて居る。其の詩は「君生四月十四日、稟氣純陽稱其名」と云ふのであります。純陽は呂巖の字であります。かういふ風に小竹は呂巖を氣取つて居つたものと見へる。之に就て又一寸一つの話がある。頼山陽は子年（安永九年）の十二月に生れた。其處で蘇東坡が十二月に生れて居るから山陽は生涯日本の東坡を氣取つて居つたと云ふのが、小竹と一對の笑話であらうと思ふ。デ小竹は生年が丑であつたから後年臥牛を刻した硯を愛藏し

た。「青牛避世老萊子」といふ句を作った。一生仕へなかつた人であるから、さう云ふ様な句を作つて居る。夫れで小竹は即ち天明元年に生れまして、山陽よりは一つ年が下で加藤吉翁の郷里の豊後の廣瀬淡窓よりは一歳の兄と云ふ事になつて居る。

小竹は寛政元年九歳の時から、江戸堀犬齋橋の儒者篠崎長兵衛三島の方へ稽古に通ひまして、十三歳の寛政五年に三島の養子になつた。其の時三島は五十三歳でございました。三島と云ふ號の事は後に申しますが、伊豫の三島を取つて三島と云つたらしい。其處で篠崎と云ふ實家の方は大分古い家であつて、天正頃に伊豫の喜多郡に篠崎右馬丞と云ふのと、其の弟の對馬と云ふ兄弟があつて、其の祖先は長曾我部から出て居ると云ふ事になつてをります。右馬丞の墓は喜多郡の論田と云ふ所にあつて、厄病よけの神として祀られてゐると云ふ事ではありますが、まア多少土地の名族であつたらうと思ふ。所が其の子孫が遂に農に歸して内子村に住んで居つた。其の後に光忍・忠常と云ふ二代を経て、忠常の二番息子の忠中の代に、伊豫の大洲の井上氏に身を寄せた。すると井上の家が間もなく大阪に移りまして時分に忠仲も一緒に大阪に上つた。之が享保十一年二十八歳の時でございました。忠仲と云ふ人は非常に勤儉力行な人で、一文なしから段々に仕上げまして、四五年經つ中に大分財産が出来た。する中に曾根崎邊に徳峰と云ふ分限者があつて、忠仲に惚込んで自分の方へ養子に迎へ取つて、而して姪に楫井氏と云ふ娘がある。夫れとめあはした。而して死際に財産から總ての處分をば此の人に託して了つた。さうすると其の義理の母親と云ふ人が、自分の子が其處にあつて、夫に徳峰家の遺産を遣りたいと云ふ所から、非常に一家の波瀾が起つて、其の結果忠仲夫婦は家出をした。併し大體が勤儉力行の人であるから、其の家を出てから一層骨を折つて働いた。遂に兩替の商賣とか金貨をして大變な身代を造つた。そうして玉水町に家を買ひまして、丁度西国橋の西の所に當る。其邊に立派な家を求めて伊豫屋といふ——郷里の伊豫の名を取つて伊豫屋といふ立派な大阪の町人になつた。する中に寛延元年五十歳の時に国元から父の忠常が死にました事の知らせがあつた。そこで其時は歸らなかつたが三回忌に當る寛延三年の春に、一遍国

へ歸つて法事を勤め、其序に何か旨い商賣はないかといふ考を持つて居つたと見へて、半紙を澤山買集めた。丁度郷里が不景氣と百姓一揆が起つた場合であつたから、相場の下つた大洲半紙を買メめて大阪に持つて歸り、非常に金儲をしたといふ事になつて居る。所で此忠中といふ人は、非常な俠氣の人で、金を貸しても餘り催促はしない、證文も随分引破つてやろうといふ風であつたものですから、非常に伊豫屋の主人は俠骨のある人じやといふて名があつたそのである。晩年には大齋橋に隱宅を拵へまして其家をば靜心庵といふ號をつけて、明和六年三月八日七十一歳にして亡くなつた。此の靜心庵に四人子が御座いまして、其總領は輔嗣、其次が即ち三島、三男は應壽、末子は知音（この人早世）といふこの四人兄弟であつて、それで女房の榊井氏は夫に先つて、寛延元年九月二十日に死んだ。法號は芳室貞薰大師といふ。夫れで後添は佐藤氏が這入つた。この人は安永四年十二月四日に死し、明窓慧鏡比丘尼と法號した。こういう事は片山北海の書いた墓誌銘に載つて居る。夫から總領の輔嗣といふ人は名前を龍起、輔嗣を字として號を玉川子と號して、伊豫屋善右エ門といつた。所が龍起といふ名をつける前は弼之といつた。此人は諸藝に通じて居つた人で、或は刀劍の鑑定をするとか、或は笛を吹くとか、いろいろ藝能に達した人である。又橋守國に畫を學んで畫が上手なために遂に奈良の一條法親王の家來になつて、篠崎主馬と呼ばれた。而して宮さんの家來になつて居て、其の御殿の奥から總て此の人が繪を書いたと云ふ事で、又或る時は三笠山群猿の畫を寫生して法親王に上つた所が非常な御満足で、大變繪が上手だと云ふので通神亭と云ふ號を貰つた。晩年には紀州の千啐啄の高弟で茶道の宗匠になつて居つた相です。之が天明七年五月二十七日に五十三歳で亡くなつた。此の人は田島氏と云ふ方から女房を迎へたが子がいませぬ。法名を得一徹心居士と云ふた。之が三島先生の兄に當る人で、この事は田中鳴門の碑文にあります。田島氏は名はお登和さんと云つて寛政七年正月四日に死んで居る。法號は圓明智院大師といふ。

其處で三島も非常に親の風であつて、伊豫屋長兵衛と稱して、大層身代を擴げて段々と財産が殖えて居つた。併し義を重んじ財を輕んずるといふ風で、借金を喧ましく言ふて取らない。夫れが爲に中年には財産を大分減したと云ふ

事になって居る。夫で三島がさう云ふ様な家に生まれまして、さう云ふ俠氣のある人である、随分學問にも達して居った。其の頃の混沌社の連中と交際を結んで、非常に學問の方に深く這入ったものですから、到頭終ひに伊豫屋の暖簾を引込めて、別に家塾を開きまして而して商賣替をして丁った。庭に梅の樹を植えて而して梅花書屋と云ふ梅の花を標榜した大阪の儒者になった。段々と後には學問と書道の方から収入が多かったから、一度左前になった財産を取返して、元の玉水町の親の舊宅を買収して借家とした。之から家賃も這入るし、其の他色々様々の収入のあった人で、大層な金持になった。さう云ふ所へ小竹は十三歳の時に養子に迎へられて、専ら家庭の教育を受けたものと見える。學問の方は後に申し上げます。

小竹は二十三歳の亨和三年でございましたが、其の春に養父の三島に伴はれて始めて大旅行を遣った。斯れは三島の交際もございましたらうが、長崎に坂本天山と云ふ儒者があつて、其の人が長崎に居った。一度遊びに來いと云ふ譯であつて、三島に伴はれて始めて旅行を遣ったので、最初行つた所は阿波の徳島で、徳島で三島と別れて自分は泉州の武井隆藏たけぞうと云ふ人と同伴して行つた。其の途するがら讃岐の高松に参りまして、高松では長町竹石と云ふ畫師の家に逗留した……。一寸前後しましたから補ひます。三島先生の妻は荒川氏と云つて名はお梁やなさんと云つた。之は寛政十一年四月十三日に亡くなつて三島より早く死んだ。此の人に女の子が一人あつた。之が寛政十二年五月二十一日に若死をして居る。夫れからもう一人、三島の妾に一人の娘があつた。斯れは後に小竹先生の義妹と云ふ事になつて随分長生したらしい。夫から後の事です、小竹の女房さんは田島氏と云ふのは、之は叔父の得一徹心居士——叔父さんの輔嗣と云ふ人の女房さんの一族から來た人に見える。其の新婚しました時は小竹が十八九歳の時、女房さんは十四五歳の頃と見える。夫から享和元年五月七日に總領娘が生れたが、早く死んだ。夫から文化三年十二月二日に長男が生れた。之も襁褓の中に亡くなった。でございますから、小竹は大變早婚の人であつて早くから家庭を形造られたが、皆子供が亡くなつたから今の九州旅行の時分には別段澤山の家族ではなかつた。其處で高松では長町竹石の

所に居った。夫から一旦伊豫に行つて八幡濱から九州に渡つて、九州はスツカリ歩いて居る。九州旅行が済んでから下關に歸つたが、長州で大變な麻疹に罹つた。餘程重い病氣と見えて、大阪では已に死んだものと思つた位の大患であつた。けれども幸に免かれて長府の方で暫く養生をして、而して六月末に海路大阪に歸つた。此の旅行中に阿波から大阪の實母の方へ消息した手紙がある。其の手紙の文句は解りませぬが、大層面白い手紙と見へて後に門人の小村誠齋と云ふ人が之を貰つて居つた。大切にして置きましたのを三十年程経つて天保三四年の頃に、時に先生珍らしきものを貰つて居りますがと云つて出して見せた。夫で餘程九州旅行をした時の事を思い出した。其の時に面白い文章がございしますが、之は濱さんがお持ちになつて居ります。モウ一遍拜見したいと思ひますが、其の文章に書いてある所を見ると當時の事情が解る、自分は畢竟年が若いので、眞面目な手紙——日本流の俗手紙を書く事も出来なんだ。大變恥かしい事であるが何しろ阿母さんが寂しがるのを慰めたいが一杯で、旅行の視察談を書いたと云つて居りますから、其の手紙があつたれば面白いものだらうと思ふ。デ又此の旅行に就ては後に段々詩が出来て居ります。「憶昔」と云ふ詩の中の句に、「憶昔西游日、齡纔二十三、窃齋千里志、欲算一奇男、夜泊紫溟火、晨凌霧島嵐、名家忝引接、神跡得窮探」と云ふ句を歌つて居る。非常な面白い旅行であつたと見へる。日向の国の山奥で南那珂郡の吾田村と云ふ所に一つ詩句があります。夫れは揃山といふ所で詠んだ詩で遺稿には載つて居りませぬが、私は日向で見た事がある。夫であるから九州は限なく歩いたものと見へる。尤も此の九州旅行より前に十九歳の寛政十一年に江戸へ留學に行つて居るが、學問の方は今申上げませぬ。其處で一寸申上げるのは、小竹は號が澤山ある事である。一番能く通じて居る小竹と云ふ號は篠崎の篠から思ひ付いた。何日から始めたか解りませぬが、私の考では朱子學に改めた後が小竹時代で、徂來派の學問時代は南豐時代と見れば間違ひなからうと思ふ。夫れから名は弼、字は承弼と申しますが、斯れは後にさうなつたので最初は碩と云ふ名であつた。字は解りませぬ。所が伯父さんの輔嗣と云ふ人は弼之と云ふ名であつて、弼之と云ふ印をば高芙蓉が鐫つたのが残つて居つたのを三島先生から貰つて、其の時に碩を

弼に改めて其の印を始終用ひて居ったさうであるから、字の承弼も弼を貰った所から弼を承ぐと云ふ意味で附けたものであらうと考へて居ります。

其處で九州旅行から歸ったのが享和二年二十三歳の時である。其の十月に再び阿波国に行った。之は家老の稲田家の召に依て行ったものと見へる。稲田家のお客分になって之から後年々講釋に行く様になった。其の時に一寸餘談でありますが、徳島の徳島町と云ふ所に慈光寺と云ふお寺がある。住持さんは春叢和尚と云ふ。此の人は非常に珍らしい石を澤山集めて贅澤に暮して居った。小竹が遊びに行くと石を弄なつて和尚さんが遊んで居るから、大變羨しがった。其の時分にはまだ書生でもあり部屋住であつたから非常に金もなく旅行したものと思へる。斯う云ふ事は何でもない話であるが、後には大變金持だと云つて學者仲間から羨まれた。その小竹が若い折には貧乏な事を歎いて居ると思ふと一寸可笑しい。詰まり享和三年に阿波へ行きましたのが始めて稲田家の客分になった時である。其の時に阿波の老中の三木欽藏と交際して居る。夫からもう一つ旅行を申すと、二十五歳の文化二年に閏月篇と云ふ天橋立の紀行を書いて居る。之は後に土佐の岡秋浦と云ふ人が跋を書いて居つて、自慢の文章であつたらしい。夫から其の次の旅行は二十八歳の文化五年の春で、再び江戸に留學して居る。而して春に行つて夏に歸つて來て、其の時始めて山陽と交際した。頼山陽とは終生護るべからざる交際でございましたが、交際の始は二度目に江戸に行つて歸つてから後の事で、其の時には小竹の方から山陽の方へ手紙を以て學問上の交際を求めて居る。山陽と顔を見合したのは、山陽十八歳の時に江戸修業をして大阪に立寄つた時が對面の初めである。學問上の交際は二十八歳から始まる。三十歳になりました文化七年七月に、古賀侗庵に手紙を遣つて居る。其の中に斯う云ふ文句がある。「私は近頃大に感ずる所あつて誠に人に仕へる事をしない様にして居る」と云ふ。生涯仕へずして町儒者で遣りたいと云ふ氣焰を吐いて居る。其の文章を古賀侗庵に送つて居る。デあるから若い時分から大阪の町儒者になる覺悟を以て居つたらしい。夫で少し許り年代順に申上げます。文化九年三十二歳の時に幸三郎と云ふ人が生れた。名を讓。字を興讓と云ふ小供があ

った。非常な俊才でございましたが、之も後に申上げますが若く死んで居る。小供には大變縁の薄い人らしかった。三十三歳の文化十年十月三十日に師匠にして養父である三島先生は、七十七歳の高齡で死んだ。天満の天徳寺に葬った。墓誌銘は精里先生に書いて貰つて居る。精里の書いた碑文の中に「混沌社中尤も嶺崎磊落にして鋒穎を露はすものは三島翁たりしに湖海の豪士復た此の翁なし。」と書いて居る。大阪の町人として俠骨のあつた事を書いて居る。此の三島先生の死んだ事は、小竹の極く若い時からの友達の武内確齋たけうちかくさいと云ふ人から同じ學問友達の讃岐の中山龜山に手紙を遣つて、龜山の方から又手紙を遣つて居る。確齋と云ふのは小竹の一番親しい友達であつて、若い頃の學問上の友達は中山龜山であつたらしい。此の年に最初江戸に行った時に教を受けた尾藤二州も文化十年に六十九歳で亡くなつて居る。斯くて小竹は養父を失ふて益町人文學者としての一本立になつたのである。デ三島を助けて梅花書屋の家塾を引受けた其の頃には、齋藤町——今の尼ヶ崎橋の西に家を移して居る。其の家を移したのは文化十三年の三十六歳の冬であつた。此處に其の翌年正月の人別調寺受狀寫がございます。毎年正月に戸籍の書換えを致します。其の控が彼處に並べました不可忘と云ふ小竹の手帳の中に書いてあります。一寸讀んで見ます。「齋藤町加島屋吉兵衛の借家篠崎長左衛門、女房さち、男子二人ニ譲、其の次が諫——此諫と云ふ人は文化十四年十月三十日に死にました。年は解りませぬが極く若い中に死んだ。女の子が三人ニ總領はおまち——之は後に後藤松陰の方へ嫁に行った人。其の次はおつう——之は後に訥堂を迎へて養子にした。末の娘はおてい——之は石州奥村克勤と云ふ方へ嫁入した。夫から伯母にとみと云ふ人」斯う云ふ事になつて居る。夫で末の娘おていと云ふ——之は奥村と云ふ人の家へ行くまでに、筒井元美と云ふ人の家へ嫁いで、其の人が何うかなつて二度目に此の克勤を迎へたらしう思ふ。

夫で家督を繼いだ始めの元日の詩に、「移家兼徒屋端梅、綠萼迎春次第開」と云ふ句がある。三島先生が始めて手植をして、町人から儒者になつた。其の記念にした梅が梅花書屋の標榜になつた。之が齋藤町の方に植換へられたものと見へる。其の年の三月二十二日に光格天皇は仁孝天皇へ御讓位になりまして櫻町御所に御遷幸になつた。其の日

記は遷幸日記と云つて鹿田さんの所持になつて居る。夫から始めて江戸へ留學をした時の師匠古賀精里が此の年に死んで、大阪の中井履軒も此の年に死んだ。段々老人の先生がなくなつて若い人の時代になつて來た。夫から今の諫と云ふ兒供の後の三男にモウ一人あつたが之も生れて間もなく死んだ。詰り男の子は早く亡くなつて了ふて娘だけ残つた。

文政二年の三十九歳の時の春三月七日に山陽が京より下つて來まして、山陽の郷里なる廣島から母の梅颯と云ふ人を迎へて吉野の花見に行つた事がございます。其の時に山陽は大阪では親類の越智高洲の所と中井抑樓の方と小竹の宅等に來て遊んで居る。デ其の年の春四月十七日に山陽は又再び下阪して遊びに來た事がある。其の時に山陽は阿母さんの梅颯に随ひまして網島へさして船行をした。其の時に小竹も一緒に誘はれた。夫から中之島の公園地の端の所に居た金谷興詩及び女房のお榮さん、夫れから越智高洲の女房お元さん等を連れて面白く船行をして遊んだ。其の時に詩を作つた。「醗錢舟載酒、江渚弄春晴」と云ふ句を作つて居る。此の時分には最早立派な浪華の儒者になつて餘程家計も豊かであつたものと見へる。

夫からモウ一つ友人の事を言ふと、文政四年三月十九日小竹四十一歳の時に、栗山の後嗣の柴野碧海が江戸に行く途大阪へ來て遊んだ。此の柴野碧海とは非常に馬合と見へて、阿波の藍玉屋の主人坪井虹山と武内確齋と一緒に遊んで居る。碧海は小竹より九つの年上でございますが、餘程學問上に就ては碧海に恩があるものと見えます。一寸之は小竹の傳でございませぬが、碧海の事に就て……、私は此の間徳島へ參つて那波魯堂の事を調べた所が、丁度那波の屋敷の横町が柴野家の後裔の人が居る所ちやと聞いて、其處を尋ねて行つた。當主の阿爺さんは鍼灸の業を遣つて居る。大變見すばらしい暮しである。何か遺物がないかと云ふと、何もない。唯碧海の書いた精神一到何事不成と云ふ燗ぼつた額が掛けて居つて、其の外に栗山が江戸から徳島の父に送つた長い手紙が一本ある。夫れ位のもので外に何も無い。遺稿か何かないかと云つたが、夫はないとか有るとか大變曖昧であつた。碧海の遺稿に枕上集と云ふのが出

來て居るがまだ外に八冊も遺稿の原本があつたが何處に在るかと思ふと阿波の脇町の近邊に行つて居るに云ふ事である。後に何とか手を附けて借るとか、又寫しに遣るかと思ふ事を考へて居る。柴野碧海は私共近世の文章の名人と思ふて居るから、枕上集以外の文集が自然手に入る様な事があつたら御同好の方にお見せ申さうと思つて居る。序ながら申上げて置きます。

文政五年の春二月に長田鶴洲と云ふ人と吉野の花見に行つて居る。其の時には三村崑山・越智高洲と吉野に行つて居る。大阪を出る時は一緒でなかつたが、吉野で逢ふて大變奇遇を感じたと云つて遊んだものと見へる。三村崑山と云ふ人の傳も詳しい事は解りませぬから人文會のお世話になつて調べたいと思つて居る……。其の年の秋の月見に小竹は、門人を伴ふて網島の枕流亭で大に酒を飲んだ。枕流亭は何處か解りませぬが只今の鮒宇邊か或は鮒宇の事でないかと思ふ。其の數日經つてから又山陽が大阪へ遊びに來て、同じく此の網島へ遊びに行つて居る。山陽は大阪の網島の景色が大變好きであつたと見へて、何うか晩年には網島方面へ越して來たいと云つて居る。大阪へ下つて來たのも詰り網島の方に家を見たいと云ふ事で下見に來たらしい。さう云ふ事で小竹は段々骨を折つて見た所が、略話が纏まりかけた處、地主が破談をして來たと云ふ事になつて、山陽は非常に残念がつて、浪華の一つの水は京の萬山にも勝ると云つて網島の景色を賞めて居つたが、破談になつて網島に家を越す事が出來ず、京の三本木に家を借つた。小竹から山陽に送つた詩に、「網島經營事負初、別來能莫憶江魚」と云ふ詩を作つて居る。何だか大阪の土地から山陽を遁したのは惜しい様な氣もしますが、さう云ふ事で網島には家を持つてなかつた。其の時の手紙は此處に持て參りました。快晴なれども寒く候。益御佳勝奉賀候。然ば山陽より別紙の通り申越候、非戲と被察申候、彼網島の別莊東隣は何如。幅は何程間取は何ほど、小圖にてもザツと御書被下、儼質及賣價とも委數御書被下度奉請候、尤右の別莊にも限らず不申候間よろしき別莊あれば御知らせ被下度候。山陽を移居させるも面白在候間可然勾當可被下候。他は拜眉可申盡、急急返書遣度候故特に申入候。不具

二月廿八日

元 馭 社 兄（吳策）

斯うあるから小竹も骨を折って見たがいけなかった。

文政六年四十三歳の時に小竹は京に上って山陽を訪問にいった。歸ってから稻田家の方へ行つた。夫から文政の七年三月十四日に山陽の母の梅颯が再び吉野の花を見に行くので山陽は京から大阪へ迎へに來て、六月二十四日の歸りがけにも大阪へ下って遊んだ。其時に木津川の方へ遊びに行つて大川の方へ舟遊びをして居る。其時の同行者は小竹・享安・鶴齋（確齋？）・門人後藤松陰といふ事になって居る。其翌日には門人やら大勢連れて山陽親子を誘ふて天神の夏祭りの舟遊びをした。舟の中の餘興として三味彈きの女を雇入れて大變御馳走をして居る。其翌日には山陽から返禮として呼返して居る。其時の同行者は小竹・確齋・廣瀬筑梁・享安・安部縑洲といふ人が一所に遊びにいつて居る。其年の九月一日に京都から又山陽親子が遊びに來て、其二日に中芝居へ案内をして居る。其翌日には後藤松陰を連れて住吉詣をするとか餘程頼家と親しくなつて、殊に松陰は山陽の高弟で御座いますから、そういふ關係で一番親しくして居つた。夫から文政八年の四十五歳の時に山陽と東本願寺の學頭大谷雲華が小竹と三人同伴して野呂介石を訪問にいった。此時一寸話がある。介石は其時八十近い老人でございましたが、年取て床に這入つて居つた。すると寢床の傍にいつてとが晝法に就て少し計り議論を聞きたいといつて頼んだ。そうすると介石は能く來て呉れたといつて、席上晝を書いて大に南晝の議論をしたそうです。其時小竹も何か書いて貰ひたいといつた所が、介石がいふにはどうも絹地はよくない。唐紙に限るがとよい紙がない。紙さへあればどんな晝でも書いてやるといつたから、小竹は紙は大變よいがある、私のうちには數十年前に舶來したよい唐紙があるから、さし上るからどうか晝を書いて呉れと頼んだ。介石は大變喜んで紙があるなら大きな山水の晝を書いてやるといふ約束をして、歸つてから小竹は、約束通り例の紙を送つて遣つた。そうすると晝が出來たか出來ないか分らん間に介石は死んで仕舞つた。豈

圖らんや立派な大きな横巻の山水といふものを山陽が貰つて居る。どう間違ふたか頼家の方へ行って仕舞ふた。小竹は其横巻を見て、非常に残念がつた文章を書いて居るが、一寸介石丈に面白い話だらうと思ふて申上げた。

夫で私の調べましたのは、成るべく年の順、年代順で家庭の方を調べて、夫が濟みましてから學問上の事を年代順に考へて行きたいと思つて調べました。併し斯う云ふ様な調方は、大變お話申して趣味がございませぬ。一向詰らぬ材料の様に思ふ。けれども大體日本流の傳記の書方は、何うも材料が揃はぬ。隨分材料が揃ふと思へば年代順でない。夫で私は月も日も取調べて、段々根底から取調べて行きたいと思つて、小竹の調も年號から月日まで能く調べて居る積なんです。併し丁度一時間許り経ちましたから、先づ小竹の家庭の方の四十臺位で擱めて置きます。

先づ小竹と云ふ人が何う云ふ生活を送つたと云ふ事は、不十分ながらお解りにならうと思ひます。尙之に就て何か逸事を御承知の方は仰せを願ひたいと思ひます。

甚だ詰らぬ話でございましたが……。(拍手)

篠崎小竹(第二席)

それでは續いて申し上げます、小竹四十六歳の文政八年三月二十一日に伊勢の齋藤拙堂が訪問に來ました。此時に小竹は筑梁、松陰等を初めとして十數名の人を誘ひまして、夜に入るまで詩を作つたり何かして遊んだ、此秋の八月五日に聖堂から野田笛浦が駿河の清水港に漂着した支那人を長崎まで送つて行つた役目をすましての歸りがけに、詩文の草稿を持つて見てもらひに來ました。(海紅園小稿)これが笛浦と小竹が交際した初めだらうと思ひます。其年の十一月十五日に、山陽から送つて來た手紙の中に「松陰の移居如何」と尋ねさて

納幣相濟御互に安心に候三嶋先生の冥慮にも相協可申唯世張(松陰の字)行末永續のみ專要と奉存候確齋此事を勾

當す云々

の語がございます。これは誰れの嫁入を申した事か分りませんが、此時松陰は三十歳でございます、或は小竹の長女のおまちさんを迎へた時の事ではないかと思ふ、其時の手紙に漢文體の手紙もありますが、山陽が小竹と確齋兩方宛にした其文句の中に

今段喫緊一事、得^レ儀就緒、兩共降心、計兄兩行在近、敕家具妝奩、拮据可想、奩之厚薄非所論、要知不擇貧富、婿此寒酸書生者、在成尊先（三嶋）之志、云々

といふ文句があります。これはどうしても松陰の婚禮の時の事だろうと思ふ。此の漢文の手紙は濱さんの方にありますが、其末におかしげな話がある。山陽が追書手書をして、唐宋詩醇を賣拂いたから小竹に託して來た、その事の催促が書いてある、さきの嫁入の話をうけて、唐宋詩醇は嫁入出來候やといふ山陽一流の洒落を書いて居る、既に小竹は金持の儒者になつて居つたが、山陽はまだ書物を賣拂ふ時代であつたらしい、其年の十二月十一日に長男の幸三郎が死にまして年は十五歳、其二十五日に竹馬の友人武内確齋は五十七歳で死んだ、確齋の墓は山小橋^{をはせ}の傳長寺にございます。小竹が文章を書いて山陽が題額を書いて居る。文政十年小竹四十七歳の年、三月一日に山陽は母の梅颯と叔父の杏坪とが上方へ遊びに來て、京都から大阪へ來た、此時小竹は又松陰等を連れて之を待遇して居る、一寸又話が前後するが、此幸三郎は文化九年小竹が三十二歳の時に生れたのですが、大層病身であつたので學問の方はあまりいけなかつた、始終多田の温泉に轉地療養にいつて居つたらしい、併し山陽は此の幸三郎を指して非常に英物だと云つて賞めて居つた事が書いてあります、十五歳に亡くなつたのであるから、若し生きて居つたら立派な後を取るべき人であるが、小竹は男の子に縁が薄くて……幸三郎の墓は天滿の天徳寺にございます。碑文は後藤松陰が書いて小竹門人の吳策が文字を書いて居る。夫で前の續きになりますが、山陽と梅颯、杏坪の三人が尋ねて來たので、小竹は三月三日の節句に汐干狩に松陰、筑梁を連れて住吉詣をした、此の時杏坪と小竹とは非常に久し振の對面でございます

たので、「別來三十有餘年、忽聞翁來善欲顚」と云つて居る、杏坪は之に對して、「更有良朋通家子、津上風物不蕭然」と云ふ次韻をして居る、而して此の一行は京上りをして吉野の花見に行き、聽て京都へ歸つた、四月十六日に小竹は京へ行つて杏坪の宿をも訪うて非常に親しく遊んで、五月九日に有馬行となつて京都から下つて來た。小竹は松陰と共に伊丹まで此の一行を見送つて、劍菱の阪上の家で御馳走になつて歸つて參りました。此の年の三月二十八日に小竹の若い時からの友人渡邊長城と云ふ人が五十七歳で亡くなつて居る、長城は三島の門人渡邊文平と云ふ人で、難波橋筋の博勞町邊に家塾があつた。之も山小橋の確齋の隣に墓がございます。小竹が其の碑文を書いて居る。

夫から其の次は文政十一年四十八歳の夏に、小竹は有馬の温泉へ行きました。其秋は山陽を京都に訪ふて、東寺の古文書を展覽した。其翌年の文政十二年五月九日四十九歳の時に、梅颯が又山陽の方に來て居りましたのを訪問のため小竹は京都にいつて、山陽の女房の親許になる、小石元陽と三人で遊んで十一日に歸つた。そうして前から一々申しませんが大抵秋には阿波の稻田家が洲本の城代になつて居つたから、始終洲本へ行つて居る、其秋に箕面の紅葉見に山陽なんかと連れなうて見にいつて居る、道順を申すと二十二日に阪上の方で一泊した、すると其所に友人の田能村竹田がやつて來た、そういう連中で二十三日に箕面の紅葉見をして歸つた。此時に竹田は大阪の町外れから途中の景色を寫生して居たものと見へて、それは目撃佳趣帖と云つて大變な骨董品になつて居る、夫れには山陽や竹田の書畫があるので非常に高價な品だそうです。其二十二日に山陽親子は國へ歸りますので、小竹はそれを見送つて其所で別れた。天保元年の春に岡田半江——山陽小竹と大變親しくした人——と後藤松陰と同伴して伊丹の方から多田の方へ遊びにいつた、其時丁度八年前に亡くなつた幸三郎を連れて多田に遊びに來た事の懷舊の詩を作つた。其時に途中の寫生は半江が致しまして松陰が紀行を書いて居る。これも大變な骨董品になつて居ります。天保二年五十一歳の夏に、齋藤町から川向ひの船場の方の尼ヶ崎の東詰を南にいつた所へ家屋敷を新築して引移つた。此頃が小竹先生が一番盛んな時分だろつと思ひます。初め文化十三年の冬に養父三島から譲り受けた家屋敷をば人に譲つて仕舞まし

て、齋藤町に移ってから十五年目になります。矢張り三島が手植の梅は尼ヶ崎町の家にも移して來たといふ様な事になって居る。此頃はモウ既に藏書が千餘卷と云ふ藏書であつたが、小竹流で土藏に仕舞込まずに書齋に積んで置いた。

其翌年の天保三年秋九月十七日に京都に参りまして、山陽の病氣を見舞に行つた、其時に山陽詩鈔の序を作つた、病氣の山陽は非常に喜んで、此の大文章を拜見して覺えず病氣が癒つたやうに思ふと云つて居る。又久しく見なんだと云ふので、

「喜聞吾友聲、力疾俟相迎」の詩を作つた。是は山陽絶筆の句であります。到頭山陽は此の月の二十三日の夕方に五十三歳にして亡くなつた。其の時小竹は「前日訪君夕、鳬濱月正圓、君識吾警咳、力疾喜相延、爲吾作五律、知己屬意專。」と追悼の句を作つて居る。非常に落膽して二十年來の舊友を失ふた事を悲しんで居る。天保五年の五十四歳の新年の詩に、「婚嫁畢時心始閑、」と云ふ句がある。息子は早く亡くなつたが、三人の娘の嫁入が濟んだと云ふ事を喜んだらしい。其の五月に但馬城崎の温泉へ入浴に行つた、それをば筑梁、松陰などが尼ヶ崎まで見送つて居る、兵庫から明石を経て播州の三本に行つた。そこで竹中重治の墓を弔した詩がある。それから但馬に這入つて湯島に逗留をした。其の間に名高い木屋と云ふ料理屋——殘夜水明樓と云ふ栗山の遊びに行つた處——其所で詩を作つて遊んだ。此の前に私が参りました時分に澤山小竹の書いたものを見ることがあります。其の湯島逗留中に京都の大倉笠山と云ふ人が遊びに來たので、小竹は「小竹々杖笠山笠、笠自京城杖自樹」と云ふ滑稽な詩を作つて居る。此の逗留の間に王代おふた一覽を讀んで咏史十二首と云ふ大作をやつて居ります。是より三十年前に栗山が此の邊に遊んだ時に、栗山のお供をした高見玉潤と云ふ人がある。小竹の贈つて來た詩に答へて、今友人で殘つて居るのは栗山の跡取の碧海と貴方の二人だと云つて喜んで居る。又其の時にお醫者の杏山と云ふ人がある。それから江戸の松月と云ふ人も温泉に來て居つたので、留別の詩に「吾在松杏間、無能一小竹、禁酒嬾於僧、公事日三浴」と云ふこれも小竹流の詩を作つて

居る。六月下旬湯島を立て出石の方に這入って、其所で櫻井東門の家を訪うた、大層此家で御馳走になった。ところが櫻井の家では小竹に庭の築山へ記念の名を付けて呉れと言って手入をした。築山の麓を切開きまして、其の切開いた所を小竹遙と云ふ名を付けておる、今でもございます。出石から六月二十五日に但馬の森垣と云ふ所に出で播州に這入って、瀧ノ川に遊んで歸った。天保六年五十五歳の時に土佐の佐川と云ふ所に名教館と云ふ家塾を拵へて居る。黒岩龍溪、名は順字は子進、此の人は享年六十一歳で亡くなって居る。小竹は其の墓碑銘を書いて居る。それから其の年の三月に小竹は女房と訥堂の母親の三人連で花見に行った。其の時に大阪の城代に来て居った所の上州安中の板倉勝靜（甘雨）と云ふ殿さんがある、其の人から澤山饒別の酒を貰った、さうして其の酒をば二挺の樽に容れて供に持たしてやつたと云ふ事が書いてある、さうしてズッと京都から桂川あたりから嵐山を廻った、其の時桂川の船の中では横笛を吹いて大變通を遣つたと云ふ事である。天龍寺に泊って北野邊を見て、夫からズッと東山、宇治の方へ行つた。さうすると其の時宇治の萬碧樓に行くと、山陽と十年前に來た折に山陽の書いた額が掲つてあるので、非常に懷舊の情を催した。それから奈良、初瀬、多武の峯、上市其の邊へ遊びに行った。歸りは法隆寺、龍田を歩いて到頭二挺の樽がなくなつて歸つた。柴野碧海は此の秋に亡くなった。天保八年の五十七歳の時に、野田留浦と同伴で月の瀬の梅を見に行った。之より前に天保二年の二月に山陽から誘引があつて、竹田と二人で行く筈であつたが、遂に行けなかつて今年始めて月の瀬の梅を見た、所が茲に一寸話があります。

此の月の瀬に行った留守中に大阪では大變な事が起つた、大鹽の亂が起つた、家に歸つて見ると云ふと、船場の尼ヶ崎町は大騒動をして居る、書物は焼けたらうと思つて歸つて見ると、案外別條はなかつた。所が書物は焼けなかつて宜つたが、小竹の借家人に山田屋大助と云ふ藥屋があつた。之が能勢邊に田地田畑を澤山持つて居つた。所が大助は能勢邊りの百姓を語らうて、千人許りの同勢を組立てさせ、池田伊丹邊の金持の家をふち毀しかかつて、大騒動を起した、が大阪の方から討手が參りましたので、烏合の衆であるから直ぐに散ばつて仕舞つた。其時大助は鐵砲腹

で自滅したといふ事である。さうして女房子供は牢に這入る、家は缺所になる、すると反古檄の中から大鹽の檄文が一枚出て來た。だんだんお調べになった所が之は篠崎家の方から廻つて來たといふ事から到頭小竹先生、非常なお咎めを受けて手錠を箠められたといふ事であるが、間もなく赦免になりました。此時塾生は皆外出を禁ぜられたといふ騒動が起つた。之れは小竹一代の不覺であつたらしい。此時に岡田半江も大鹽と親しき交際があつて暫く牢に這入つたといふ事である。又其上小竹は山田屋の女房子供が牢に這入つて居る間家主の廉を以て毎日牢飯代を一貫文宛一年評り拂つた。さういふ様な災難があつた。其頃に頼杏坪の息子に頼佐一郎とふ人、號を采眞さいしんといつた、之れが廣島藩の大坂屋敷詰で御座いまして、大變小竹の世話になつて親しくして居つた。

小竹は五十九歳頃から、病を得と雖も日として書を讀まざるはなしといふ句がございますが、腸の病がだんだん烈しくなつたものと見へて、これが後に到頭死病になつたらしい。天保十一年六十歳の時に奈良の方から龍田の方あたりへ遊びにいった。其秋には又廣瀬旭莊や中西耕石等と箕面に遊びにいった。例の伊丹から多田へ遊びに行った、廣瀬の日記日間瑣事の中には多分精しく書いてあるうと思ひます。天保十二年の六十一歳の元日の詩に、「慙愧諸君莫見賀」といふ句を作つた。還曆の賀といふ事を開かず送つた。此年の閏正月五日に城代の板倉侯に招かれて講釋をしたといふ風で、時々城中に呼ばれて講釋をしたものと思はる。その四月に又腸が悪いので多田の温泉に入湯にいつて居つた。其間に仙臺の齋藤竹堂から頼まれた文章の草稿を携へて評をした。天保十三年の正月に養子の訥堂が江戸へ修業に行くのを送つた句に、「猶能健飯早朝起、授讀生徒數十人、」留字になつても矢張自分は建康で塾生を教へてゐると云ふ事を言つて居るから、まだ中々盛んであつた。腸の病が癒り、此の春は仁和寺法親王に招かれて講釋をした、其の途すがら京都に這入つて福井丹波守禁中の醫の家に رفت。此の夏に小竹齋詩鈔の序文が拙堂から廻つて來た。小竹は詩稿の中を拔萃してチャンと整理をして詩鈔を作つたものと思へる。天保十四年の六十三歳の時に土佐の箕浦耕兩といふ學者が訪問に參りました。これは若い時の昌平學校當時の友人でございました。大變古い友達であ

る。此の年に日は解りませぬが、五月頃でせう。稻田九郎兵衛の洲本の家老が小竹の家に来て逗留をしたと云ふ事である。非常に親しく信任を受けて居ったものと見へる。

弘化元年六十四歳の正月二十八日の晩に、尼ヶ崎町に火事があつた、其時一番眞先に見舞に來たのは周防の海防狂とよばれた僧月性である。河内の觀心寺の楠公の首塚の碑は非常に傑作といふ事ですがこの時分に出來た文章である。その火事の時に江戸の大槻磐溪も火事に出逢つた事を思ひ合せてこういふ事をいふて居る、「蕨末春初二十八、與君先後火災同、傳聞千里相憐意聊寓二十八字中」と相變らず洒落れた詩を作つて居る、磐溪とは餘程前から知合と見へて、磐溪の詩文集などは小竹が序文を作つて居る。翌年の弘化二年六十五歳の四月五月といふ間は例の腸の爲めに有馬の温泉にいつて居つた。弘化三年六十六歳の春に、岡田半江が死んだので非常に之れを悼んで「仕官中年罷、丹青晚歲專、風流能肖父、(米山)解説恰似仙、家已兒孫保、名方遠近傳、計來吾落淚、竹馬五十年」といふ詩を作つた。山陽は能く人を冷評した人と見へて貴様は畫が上手だから交際するのでない、お前の人物がお好きだから交際するとかいつたさうです。

六十七歳の弘化四年に江州水口の中村栗園が丁度四十二歳の厄年であるので厄拂の詩を作つてやつた。栗園は小竹に學んだ人でないが小竹には非常に恩のある人である。此年四十年來の交際のあつた古賀侗庵も死んで仕舞ふた。此所で一寸餘談を申しますが、小竹の金持といふ事は始終友人間の物語りになつたものと見へて弘化四年の冬に出版した妙々奇談といふ芝居の評判記まがひの本がござい、其評判記に小竹は座頭になつて居る、「ヤレ待て居ました、日本一日本一、十二日本一だヘン銅臭儒者の日本一だらう、お江戸に聞える、愛日樓(佐藤一齋)様といふ日本一を知らねへか鴻池の丁稚を日本一とア臍が笑わア、それはそれ近頃森田謙藏(節齋)と往復があつたそうだが再び返事をせられぬゆゑ世間では先生がぶたれたと申升、なにに先生の腕で返事が出來ねへものか、面倒だからせぬのだ、イヤイヤ◎にならねへからだらう」と徹頭徹尾金の事でひやかされてゐる。所で小竹はどれだけ金持であつたか分り

ませんが非常に書が流行ったものですから、晩年には潤筆料でも一年五百金あったと立派に行狀にも書いてある、此頃の五百金ですから大變なものである。小竹が金を儲けたといつて行狀に書くのは酷いといふので跡では削りました。が初めの原稿には立派に書いてある。又板倉侯に送った文章の中に一家の經濟法を述べて「弼筆舌を以て耕に代へ歳入二百金」といふ事を言つて居りますから大抵此邊で小竹の収入も分りませう、然し大體儒者といふものは貧乏であつたから少し許りの事を彼は言つたものであらうと思ふ。

嘉永元年六十八歳になりました時の春に、難波小橋の東詰に小さな隠居所を拵えて、五小樓と云ふものを拵えて其處に遊んで居った。何ぜ五小と云ふかといふと難波小橋の小が一つ、其の場所は肥前の小城の倉屋敷前で小の字が一つ、家の小さい事は僅かに膝を容れる位と云ふのが一つ、小竹の小が一つ、小閑を偷んで來ると云ふので一つ、都合小が五つになる、五小樓と云ふ滑稽な文章で書いてあります。之より前に大江橋の北詰西の方へお母さんの隠居所を造つて、水明樓と云ふ名を付けて居た處が、茶山が行て殘夜水明樓と云ふ名に替へた。其の額面があつた相ですが、ところどころ失ふたその額が、伯耆の米子の鹿島養吉と云ふ門人の方から手紙が來ました。其の手紙の中に、偶然にも茶山の書いた額が手に入りました。その水明樓の詩は茶山の詩鈔にも載つて居るから、先生の家にそれがある事を知つて非常に喜んで居る。自分の新築した書齋に其の額を掛けて居ると言つたから、大層奇遇であると言つて喜んだ。

嘉永三年七十歳の十二月に懷德堂派の清水中州（履軒の門人）の文章を見て、懷德堂の連中は殆んど無くなつたが、今残つてゐるは君一人だと云つて文章を書いて居る。此の年の秋に稻田九郎兵衛の方から小竹の肖像を寄越せと云ふ手紙が參りましたので、肖像を畫かして稻田の方に送つた。此處に掲げてありますのは其の肖像の寫であらうと思ひます。恰度七十歳の時の肖像でございます。七十の賀には門人奥野小山が虎屋の饅頭と云ふ説を作つて小竹の壽詞を書いて先生に捧げた。嘉永四年七十一歳の春に一寸京都へ行つた事がある、此れが旅行の仕濟であらうと思ひま

す。圖書館の本には恰度此の時分までの詩も文も原稿が揃って居りますが、文章の方の絶筆は、「北條退藏の母井上敬女墓銘」と云ふのが絶筆であります。此の北條退藏と云ふ人は備後の人で井上正信と云ふ人の子で、茶山先生の養子になった人である。お母さんは即ち茶山の妹に當り退藏は北條霞亭と云ふ人の跡を繼いだ人で霞亭は山陽の親友であつた。其の人の母の井上けいと云ふ人の墓碑銘を作つたのが文章の絶筆になった。此の年になると非常に腸が悪い、最も一昨年の冬當りから大變重くなって参りまして、朝早く起きて塾生を教える事は差支なかつたが、午前中には如何しても一遍晝寝をしないと身體が持たぬと云ふ様な事で、一晝夜の間筆硯に親しむのはホンノ二三時しかないと言つて居る、大分衰へて來た、此の腸の病に就ては山陽なりモー一人の友人の紀春琴などが大變若い時から心配して、君の腸はドウも不治の病になりはせんかと云つて居つたが、随分長生をしましたが、屢々腸が悪くなつて到頭五月八日と云ふ日に終焉の人となつた。危篤に迫つてから少し評り咯血をした相である。葬式の時、尼ヶ崎から天徳寺まで大變立派な葬式があつた。其の内に篠崎門の四天王の一人奥野小山は何か行違ひがあつて、葬式の御供をしなかつた。小竹先生が亡くなつたに就て澤山の人から追悼の詩文を送つて居りますが、此は廉田さんの方に屏風になつて残つて居ります。此の時分に近世名家文鈔と云ふものを月性が集めたが、板にならない中に到頭小竹は死にました。小竹の奥さんの田島と云ふ人は、之は何う云ふ譯か知らぬが、始めの中は田中と名乗つて居る。安政四年十一月晦日に七十二歳でなくなつた。

それから一寸訥堂の事を申します。訥堂は通稱長平、江戸の人であります。其の母親と云ふのは伊豫の大洲藩の娘で、訥堂は若い間は古賀侗庵に學んで居つて、二十二歳の時に侗庵の紹介を以て小竹の門弟になつた。小竹が言ふには足下は自分の主家の加藤と同じ苗字だ、大洲といふ所は我が篠崎家の由緒の土地である、お前のお母さんはその藩士の娘である、まだ其の上に私も足下も並に古賀の方から學説を受けて居るから、大變因縁が深いから中娘の婿になつて呉れと云ふので、遂に養子とした。訥堂は安政五年八月二十八日に亡くなりまして、一人男の子があつたけれど

も若死をした、嫁さんのお通さんも安政四年一月二十六日に亡くなった、餘程篠崎の後は少なくなった。訥堂と云ふ人は、大變藝妓遊びをした人や相で、此の新天地から藝妓を受出したと云ふ事である。大藏と云ふ人を養子にして家を繼がせたが、當主の篠崎純吉は本年十月十五日に東京で死なれた、到頭さう云ふ事で篠崎家は亡くなった。

松陰の方の事を一寸申します。松陰の養子の箕山といふ人は名は元美、字は子長、通稱辰之助といった。尾張の神谷純一といふ人の息子で、其妻は阪上家から迎へて、常磐と云ふた。播州三日月藩の留守居役坂上譽之の長女である、辰之助は安政八年正月二十二日に後藤松陰より先に死にました。もう一人桐坪といふ（通稱堅藏）養子があつたが、それは慶應三年四月十一日死んだ。それで小竹の娘おまちさん即ち松陰の妻は安政六年七月十八日になくなりました。之れで後藤の家は絶えた。

小竹が亡くなつてから九年目、萬延元年冬に篠崎家の書畫古器物を賣拂うた。それは大變なものであつて、中にも徂徠の珍幅其他の書は伊丹の阪上家と備後町の田中さんとで分けたさうです。其外非常に澤山の拂物があつた。位牌は此處に寫して來ましたが、天徳寺にございます。清貞休和居士といふ貞和といふのが諡となつて居ります。三島のも取つて置ましたから御覽を願ひます。で過去帖の方には小竹の本名は書いてございません。どういふことかと聞いて見ると、弘化四年頃の過去帖は失ふたといふ事で、今には一族は精しく書いてあるが小竹の處だけ抜けて居ります。